

日韓文化交流基金 NEWS



Contents

- 01 第16回 日韓文化交流基金賞
- 02-03 青少年事業
日韓交流おまつり
～現代よみがえる朝鮮通信使のころ～
- 04 青少年事業
平和への思いに国の違いはない
～当基金交流事業初の沖縄訪問、日本の新たな一面に気付く～
- 05 青少年事業
市民交流の真髄を見出す
～日韓の市民同士の信頼で困難を克服～
- 06 韓国訪問団
第31回 日韓文化交流基金韓国訪問団
～共に開こう、新たな未来を～
- 07 助成事業
「韓日食博」におけるカリグラフィー・ワークショップ
国立民族学博物館民族社会研究部教授 朝倉敏夫
- 08-09 研究紹介
朴正熙をめぐる記憶実践
九州大学大学院比較社会文化博士 大和裕美子
- 10-12 日韓文化交流基金事業報告

公益財団法人 日韓文化交流基金 〒105-0001 東京都港区虎ノ門5 丁目12 番1号 虎ノ門ワイコービル4F Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

第16回 日韓文化交流基金賞

日韓文化交流基金では、学術・芸術分野の交流を通じて日韓両国の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創立し、毎年表彰を行っています。

本年は「日韓文化交流基金賞」を下記3名に贈呈し、日韓文化交流基金韓国訪問団の訪韓期間中の9月16日に、ソウルで贈呈式を開催しました。

受賞者PROFILE

キム スイム
金寿姪

元昌徳宮楽善齋奉仕室長
1921年1月15日生まれ



旧李家最後の皇太子、英親王李垠公の夫人、李方子妃に長年仕えられ、妃没後は日韓の有志らと、妃の追尊と顕彰のための活動を続けています。李方子妃は生前、韓国での障害者福祉に余生を捧げ、

韓国国民から熱い支持を受けました。金寿姪氏も妃とともにこの活動に参加され、同志的な役割を果たされました。毎年5月の命日には墓前祭を催し、2014年には妃を偲んで歌集『つつじ』を日韓双方で出版されるなど、妃の功績を両国の人々に伝え、妃の歴史を記録し伝承するために尽くされています。

キム スンテク
金升澤

漢撃ウインドアンサンブル音楽監督兼指揮者
1935年12月1日生まれ



1993年に創立された「漢撃ウインドアンサンブル」は現在56名の団員で構成され、年間平均公演回数は11回、創団当初から続けている定期演奏会は61回に上る等、市民楽団として活発な活動を続けていま

す。また、同楽団は日本の数多くの市民楽団及び個人演奏家と交流を持ち、ほぼ毎年済州と日本各都市を相互に訪問して開催された日韓親善交流演奏会は20回以上に上ります。金升澤氏は同楽団の音楽監督兼指揮者として運営等に携わるほか、日本人音楽指導者の招へい、相互訪問等を通じて演奏技術の向上や交流の活発化に尽くされています。

アンビョンゴン
安秉坤

慶尚大学校師範大学学長
1954年3月21日生まれ



韓国における日本語教育研究の第一人者として、日本語教育科を有する韓国唯一の国立大学である慶尚大学校において、日本語教育者養成及び日本語教育法の研究に約30年もの長きにわたり携

わり、多くの研究成果を発表すると共に約2千名の中学・高校日本語教師を養成されました。また同校日本語教育学科学生らと日本大学生との交流にも自ら引率者として参加する等、数多くの日韓学生交流や留学生の交換に積極的に関与してこられました。現在は大学で教鞭を執る傍ら、韓国における日本語教育の一層の質の向上に尽くされています。

日韓交流おまつり ～現代によみがえる朝鮮通信使のころ～

(9/14～24 韓国外交部招へい日本大学生訪問団、9/24～30 在外公館選抜韓国青年訪問団)

2015年は日韓国交正常化50周年を迎える節目の年です。日韓文化交流基金では、このような年を祝う思いを込めて、初めて「日韓交流おまつり in Tokyo」(以下、「おまつり」)に高句麗人と朝鮮通信使の衣装の試着ブースと高麗神社と朝鮮通信使関連の展示ブースを出展しました。



「おまつり in Tokyo」の当基金ブースには安倍総理夫人も訪れ、訪問団団員と交流しました

当基金のブースでは、青少年交流事業で招へいされた韓国の青年16名が試着コーナーを担当し、ブースを訪問して下さった方々と自然と交流の輪が広がりました。ホスピタリティ精神に溢れる韓国の青年は始終笑顔で出迎えたため、中にはあまりにも親切に対応してくれたと、翌日わざわざお礼を言いに来られる人もいました。「おまつり」実施の2日間で、予想をはるかに上回る、約800名が民族衣装の試着を楽しみ、ブースには2000名を超える方が訪れ、大いににぎわいました。

また、当基金のJENESYS2.0の招へい事業による21世紀ユース朝鮮通信使(以下、「ユース通信使」)は日韓両国の通信使のルートをたどり歩いていましたが、「おまつり」の朝鮮通信使パレードに参加し、大いに盛り上げました*。「ユース通信使」の代表学生は「おまつり」のオープニングセレモニーの国書交換式にて朝鮮通信使の正使・副使等の要人を務め、自分たちで内容を考えた未来へのメッセージを、日韓両政府要人の前で堂々と読み上げました。それは「ユース通信使」が足跡を辿るだけでなく、本物の通信使になった瞬間でもあり、この模様は報道でも大きく

扱われました。

一方、「日韓交流おまつり in Tokyo」に先立って韓国ソウルで「日韓交流おまつり in Seoul」が開催されました。今年で11回目を迎えるソウルの「おまつり」には、当基金が派遣したJENESYS2015 日本大学生訪問団(韓国外交部招へい)(以下、訪問団)一行がブースで日本文化の紹介を行いました。

訪問団の団員は、日本全国から集まった精鋭28名の大学生です。当日は浴衣や甚平を身にまとい、韓国人ボランティアの皆さんの協力も得ながらブースいっぱい日本の雰囲気を作り出しました。団員は4つのグループに分かれ「日本語で名前を書いてみよう!」と韓国語の名前をひらがなで書いてもらう書道コーナーやけん玉体験、日本の塗箸にデコレーションをして箸袋も作る「マイ箸作り」や色鮮やかな「うちわ作り」を行いました。

会場は大きな舞台を中心に1日中楽しいおまつりの雰囲気に入れ、あちらこちらで歓声や笑い声が湧きあがりました。当基金のブースは人で溢れ、みんなの笑顔と真剣さに、より一層人だかりができあがり、対応にとてもご舞いの団員でしたが、日本から

準備してきた材料が全てなくなってしまうほどの大盛況に、充実感と達成感を味わいました。

ソウルの「おまつり」の最後は、毎年恒例の「よさこいアリラン！」です。そこにいる誰もがその音楽に肩がリズムを取り出し、足が一步、また一步。気が付くと大きな輪ができあがり全員が「ア〜リラン、ア〜リラン、どっこいしょ！どっこいしょ！」と声をあげながらお互いの絆を感じあえる空間になっていました。

おまつりを終えた団員は、「実際に韓国の方から、どうして日本に興味を持ったのか聞くことができ、とても良い体験だった。」「自分たちで企画したブースに多くの方がきてくださったことがとても嬉しかった。」「ボランティアの韓国人学生とも交流を深められたことが忘れられない思い出になった。」と口ぐちに感想を述べていました。

*企画協力：高麗神社、一般社団法人高麗1300、NPO法人朝鮮通信使縁地連絡協議会、NPO法人日中韓から世界へ



01 ステージで通信使に扮した訪問団団員が思いを込めたメッセージを發しました (日本) 02 日韓交流おまつり in Tokyo で参加者と交流 (韓国青年訪問団) 03 韓国訪問団ブースではたくさんの方が日本文化を体験しました (写真はうちわ作り) 04 日韓交流おまつり in Seoul のステージも大盛り上がり

【日程】

訪日団

9月24日	入国・オリエンテーション
9月25日	講義：「21世紀型日韓交流—政治・経済・文化の変遷と青年交流」 (講師：神奈川大学 久田和孝准教授)
9月26日	日韓交流おまつり2015 in TOKYO ブース運営参加
9月27日	日韓交流おまつり2015 in TOKYO ブース運営参加
9月28日	高麗神社訪問 (埼玉県日高市) 日本の温泉旅館体験 (草津温泉)
9月29日	湯もみと踊りのショー見学
9月30日	お台場地区視察・帰国

訪韓団

9月15日	ソウル着・韓国国際交流財団訪問
9月16日	在韓国日本大使館広報文化院・韓国政府外交部訪問 韓国料理作り (韓国伝統飲食研究所)
9月17日	学生との懇談会 (韓国外国語大学) 韓服体験 (南山韓屋村)
9月18日	ホームステイ 昌徳宮見学
9月19日	韓国伝統公演 仮面劇観覧 日韓交流おまつり in Seoul 2015参加
9月21日	城邑民俗村・城山日出峰見学 (済州)
9月22日	ソプチコジ・Genius Loci美術館・済州オルレ見学
9月23日	APECヌリマル見学 (釜山)・感想報告会

平和への思いに国の違いはない ～当基金交流事業初の沖縄訪問、日本の新たな一面に気付く～

(7/29～8/7 在外公館選抜 韓国青年訪問団)

日韓国交正常化50周年の節目の年だからこそできる交流として両国関係に横たわる「歴史」や「戦争」をテーマにしつつ、相互理解につながる企画は何か、と考えました。そこで、今回は第二次大戦において日本では唯一の地上戦が行われた場所である沖縄滞在を中心に、各地域の魅力を存分に味わい、戦争や平和について考える日程で、7月29日から8月7日までの間に、韓国の大学生107名を招へいしました。

沖縄の皆さんと心が一つになった瞬間

沖縄での2日目、ホストファミリーとの交流会が実施されました。昼食後は地元青年団による沖縄固有の踊り、エイサーが披露され、韓国人学生の多くが踊りの輪に参加しました。ノリの良い沖縄の県民性と韓国の国民性が似ていることもあってか、最後には三線の生演奏に合わせて会場全体が楽しく踊り出しました。沖縄の皆さんと韓国の学生の心が一つになった瞬間でした。若者同士の交流には政治も外交も関係なく、人と人、心と心の交流であることを強く感じさせる一場面でした。

この交流会のあと、ホームステイに向かう学生たちと別れ、団長と引率の先生方は、第二次世界大戦当時、米軍が上陸を開始した地点であり、多くの住民が自決した地域である読谷村^{よみたんそん}巡りを行いました。ボランティアのガイドさんとともに、かつての米軍基地跡や世界遺産の座喜味城跡を巡り、琉球王国から戦後に至るまでの沖縄の歴史を語っていただきました。ガイドさんの話に真摯に耳を傾ける姿が印象的でした。



地元の皆さんとエイサーで盛り上がる
韓国人の大学生たち（沖縄県読谷村）



朝鮮陶工が祀られている、
陶山神社にて（佐賀県有田町）

被爆地の長崎、そして日韓交流のいまむかしの地を訪ねる

訪問団は滞在期間中、同じく平和発信の拠点である原爆被災地の長崎市も訪問しました。長崎原爆資料館では、その甚大な被害を目にして涙を流す学生も見られました。最後の訪問地は、日韓交流の現場を通して未来志向的に日程を終了したいという思いを込めて、佐賀県の陶山神社と名護屋城博物館を訪問しました。朝鮮半島出身の陶工李参平が14代にわたって活躍した佐賀県の有田。訪問団一行は、有田焼の始祖、初代李参平が奉られている陶山神社も見学しました。名護屋城博物館は、文禄・慶長の役の際に豊臣秀吉軍の拠点であった地に建てられた博物館ですが、韓国人交流員を置いて日韓交流をテーマとした常設展を実施したり、関連のイベントも多々行う等、未来志向の日韓関係を目指した情報発信基地としての役割を果たしています。

マイナスからプラスへ～事後アンケート結果～

事業終了後に団員から寄せられたアンケートは肯定的な意見が多く、彼らが日韓関係や歴史問題、平和について学んでくれたことが分かります。「日本の立場が分かるようになった」「日本への誤解が解けた」「日本への認識が変わった」という記述も多く、「その事実を広めたい」と書いてくれた団員も数多くいました。韓国の若者がこのような意見を寄せてくれたことは、今後の日韓関係において大きなプラスとなることに間違いありません。

今回の訪問団プログラムが、今後の日韓における歴史認識をはじめとする感情的なすれ違いと向き合っていく上でのヒントとなることを願ってやみません。

【日程】

7月29日	オリエンテーション
7月30日	落語体験（笑福亭銀瓶氏）／講義：「最近の日韓関係について（外務省北東アジア課 喜多律夫日韓交流室長）」／歓迎昼食会
7月31日	大学訪問（関東地域）
8月1日	読谷村へ移動（沖縄県）
8月2日	残波岬公園見学／昼食交流会、地元青年会によるエイサー鑑賞
8月3日	平和祈念公園・韓国人慰霊の塔および平和祈念資料館見学
8月4日	首里城跡見学
8月5日	平和公園・原爆資料館見学（長崎県）
8月6日	陶山神社・名護屋城博物館見学（佐賀県）／成果報告会
8月7日	帰国

市民交流の真髓を見出す ～日韓の市民同士の信頼で困難を克服～

(7/29～8/7 企画公募事業「ふくかねっと」交流事業)

日韓文化交流基金では、日韓の草の根交流の裾野拡大のため、両国の民間団体を対象に青少年交流事業の企画競争公募を実施しました。数多くの応募がありましたが、その中でも福島市のNPO法人「ふくかねっと」が実施した交流事業の様子を紹介します。

福島とMERSの風評被害を吹き飛ばせ！

「ふくかねっと」とは、韓国から1984年来日し、福島市で韓国語教室や韓国料理のレストランなどを運営する鄭玄実^{ちよんひよんしる}さんが理事長を務める団体です。2006年の設立以来、両国青少年の相互派遣交流や、韓国文化についての講演会、料理教室の開催等、多彩な活動を続けてきました。

東日本大震災の後には、「原発事故で放射能に汚染された地域」という韓国での福島のイメージを払拭するため、「正しい福島を伝えようプロジェクト」を展開。福島を訪れた韓国人に、帰国後、自らの体験を広く伝えてもらうことに力を注いでられました。

今回の企画は、「韓国から170名の青少年を福島に呼び、福島から70名の青少年を韓国に送る」という大型事業です。

7月29日からの訪日事業参加者は、主に全州市の市民グループが集めた中学・高校生、大学生たち。この市民グループと「ふくかねっと」とはこれまで毎年のように交流を続けてきました。今回、放射能汚染の風評被害で苦しむ福島のために立ち上がろうと、大々的な宣伝のもと、参加者を集めてくれました。そこで、韓国側事務局のスタッフは全州市から事前に来日し、すべての訪問予定地や飲食物の放射線量を測定、問題がないことを確認しました。来日時にも同様に測定を行う等、懸念される事態には万全の対応策を取ってきました。

韓国でMERS感染が広がると、「福島の風評被害と、MERSのダメージを吹き飛ばせ！」と声をあげ、むしろ日韓の事務局関係者の絆は深まってきました。その結果か、定員人数はあっという間に埋まり、キャンセル待ちも出るほどの人気を呼びました。

あきらめず困難を乗り越えた日韓市民の絆

ところが、出発3日前になって韓国内の環境団体から「放射能で汚染された危険地域福島へ韓国の青少年を送るとは何事か」と反対運動が起り、「ふくかねっと」や韓国側スタッフへの抗議の電話が殺到するという緊迫した事態に陥ってしまいました。

韓国側事務局は、出発前日に参加予定者全員に電話をかけ、福島の安全性を訴えました。また、今回の交流の取材のため、事前に福島入りしていた韓国放送局のプロデューサーや撮影スタッフも、事態を打開しようと積極的に協力してくれました。そのような努力の甲斐あって、キャンセルの申し出はほとんどなく、結果的に166名の青少年が7月29日(水)に福島の地を踏みました。

一行は、9泊10日の日程の間、福島市庭坂地区の夏祭りである「福島わらじ祭り」やファームステイ等を体験し、福島との自然と文化の魅力を満喫しました。また、福島市で開かれた訪日団一行と地元の若者との「青少年フェスティバル」には1500名以上が参加。鄭玄実さんが着物を、日本側が韓服を着て司会進行し、プログラムが進むにつれ、会場は感動の渦に巻き込まれていきました。



「青少年フェスティバル」で着物を着た鄭さんと、韓服を着た日本人司会者

日韓市民交流の成熟

今回参加した多くの韓国の青少年から、「放射能汚染の問題など出発直前にいろいろあったが、参加して本当によかった」「言葉は通じなくても、福島の人びとの気持ちの温かさを感じた」「日本の同世代の若者と会えたのがよかった」など、感謝の言葉が日韓双方の事務局に寄せられているそうです。

今回の交流事業の成功は、日韓の市民レベルにおける交流が成熟してきたという証しです。一時、激しい反対運動にも見舞われましたが、まさに市民交流ならではの強みと絆で実現できたと言っても過言ではないでしょう。これを機に、今後の日韓交流へと弾みがつき、多くの韓国の方々が福島を訪れることを願っております。



「青少年フェスティバル」のフィナーレで肩を組み合う日韓の学生たち

第31回 日韓文化交流基金韓国訪問団 ～共に開こう、新たな未来を～

31回目となる「日韓文化交流基金韓国訪問団」が9月15日から18日までの4日間、ソウルと天安を訪問しました。

日韓文化交流基金は1984年から毎年1回、財団の役員、評議員からなる韓国訪問団を派遣しています。今回の訪韓期間中には、^{ファン・ウヨ}黄祐呂副総理（兼教育部長官）をはじめとする韓国政府関係者の表敬訪問や、当基金が実施する青少年交流事業の韓国側担当機関、韓国国際教育院院長との懇談等を行いました。

日程2日目には、日韓間の文化・学術交流に貢献した韓国の方々を表彰する「日韓文化交流基金賞」の表彰式を開催しました。（1頁参照）

また、日韓国交正常化50周年を記念してのレセプション「共に開こう新たな未来を」を開催。フェローシップ経験者、過去の青少年交流事業参加者、学術会議への参加者、また、韓国内で日韓関係の仕事に従事される日本の各界の方々等、多くの方にご参加頂きました。

日程3日目の9月17日には、ソウル近郊の南楊州市に所在する英園（朝鮮王朝最後の皇太子英親王李垠公と皇太子妃、李方子妃のお墓）を訪れ、日韓友好を記念し献花しました。日韓国交正常化50周年の記念すべき年にふさわしい韓国訪問になりました。



英園を訪れた訪問団一行

【団員名簿】

団長	鮫島 章男	当基金会長、太平洋セメント(株) 名誉顧問
副団長	小野 正昭	当基金理事長、海外邦人安全協会会長
顧問	内田 富夫	当基金顧問、前理事長
団員	楢崎 正博	当基金理事、元関電産業(株) 相談役
団員	大竹 洋子	当基金評議員、元東京国際女性映画祭ディレクター
団員	伊藤 亜人	当基金顧問、東京大学名誉教授

【日程】

9月15日	ソウル到着 別所浩郎駐韓国日本国大使表敬訪問 外交部 申東益多国間外交調整官表敬訪問 李洪九韓日文化交流基金主催歓迎晩餐会
9月16日	ソウルジャパンクラブ役員との朝食懇談会 国立国際教育院 金光豪院長表敬訪問 基金賞受賞者との懇談 第16回日韓文化交流基金賞贈呈式 鮫島会長主催レセプション「共に開こう、新たな未来を」
9月17日	洪陵・英園見学 訪日・訪韓フェローとの昼食懇談会 教育部 黄祐呂副総理・長官表敬訪問 韓国日本学会役員との晩餐会
9月18日	天安到着 独立記念館見学 帰国



黄祐呂（ファン・ウヨ）副総理（兼教育部長官）（右から4人目）表敬

《韓日文化交流基金訪日団》

日韓文化交流基金の韓国内のカウンターパートである韓日文化交流基金（会長：^{イホンフ}李洪九元国務総理）の役員及び関係者一行が10月22日から25日までの4日間訪日し、初日の22日には、当基金鮫島会長の主催による歓迎晩餐会を開催しました。国交正常化50周年を記念する節目の年に両基金のこれまでの活動を振り返ると共に、今後の日韓関係のあり方等について意見の交換を行いました。



【参加者】

李相禹（韓日文化交流基金 理事長）
李大淳（韓日文化交流基金 理事、元国会議員）
李在春（韓日文化交流基金 理事、元駐ロシア大使）
柳明桓（韓日文化交流基金 理事、元外交部長官）
金秀雄（韓日文化交流基金 常任理事）
孫承喆（韓日文化交流会議 運営委員、江原大学教授）
安秉勲（元朝鮮日報副社長、編集局長）
申珪秀（国立外交院兼任教授、元駐日本大使）
金聖翰（高麗大学校教授、元外交通商部第2次官）
鮮于鉦（朝鮮日報論説委員、第12回日韓文化交流基金賞受賞）

「韓日食博」における カリグラフィー・ワークショップ

国立民族学博物館
民族社会研究部教授
朝倉敏夫

2015年8月27日から11月10日まで、国立民族学博物館では日韓外交正常化50周年を記念して、韓国国立民俗博物館と共同で、韓国と日本の食文化と博物館をテーマに「韓日食博—わかちあい・おもてなしのかたち」を開催した。

この特別展では「食文化」を五感で感じてもらうため、さまざまな展示の技法を工夫した。その一つとして京都造形芸術大学と韓国芸術総合学校の「DNA (Designers Network Asia)」プロジェクトと連携して、市場、ストリートフード、若者の食生活、オノマトペ（擬声語・擬態語）の四つの側面から日韓の若者たちの食生活を表現する作品を制作してもらった。

このうちオノマトペは、例えばソバやうどんをすするのは、日本語では「ズルズル」であり、韓国語では흥早국(フルルク)となるが、これを韓国芸術総合学校の金^{キム}^{ギョン}均^{ギョ}ン教授のアイデアで、^{カン}秉^{ビョ}寅^{イン}先生の指導によりハングルのカリグラフィーによって、いかにも、ソバやうどんをすすっているかのような字体で表現した作品を作ってもらった。

そして10月20日に姜秉寅先生をお招きして、「カリグラフィー・ワークショップ」を開催した。

まずは、本館エントランスにおいて、開会の辞を朝倉が述べ、つづいて金教授から姜先生の紹介をいただいた。その紹介が終わると同時に、エントランスの2階部分から、幅1.1m、長さ3mの白い布に書かれた姜先生の作品が六本、1階に向けて下ろされ、会場につり下げられるように演出した。これらの作品は、前日から姜先生に用意していただいたもので、韓国の著名な詩人であるリュ・シファの『百万光年の孤独の中で一節の詩を読む』から、米、水、飯粒という「食」と、蝉、秋風、キリギリスという「秋」をテーマにした俳句を選んだものだ。それらは、俳句の意味を視覚的にも感じられるように描かれている。たとえば「飯粒」は、嵐雪の「顔につく飯粒蠅にあたへけり」という句が、白布の下部に和文で、中央部にハングルで書かれ、上部にはハングルで밥알(パバル)と書かれている。その文字は子音のㅂ(ピウブ)が飯茶碗の形に描かれ、全体としては、ご飯を食べて幸せになった笑顔を表しているかのように書かれている。

ついで、エントランスの中央に敷かれた4.5m四方の紙に、姜先生が太い筆をもたれ、作品作りに立ち向かった。周りを囲んだ観衆の皆さんは、その筆使いを、息をのんで見守った。父という字が書かれた。そして、その上に横棒が一本ひかれた。すると姜先生が朝倉を呼びだし、2人で同時に筆をもち、その横棒の上に点を入れた。文字は、漢字で交流の「交」の字になった。その後、姜先生は紙の下部分にハングルで「함께 손 잡고 (ハムケ ソンチャプコ)」、和文で「共に手をむすび」と書き、大きな拍手のなかで、ご自身の名を記された。

最後に、事前に申し込みをされた方たちのハングルカリグラフィー教室が開かれた。小学生の男の子から60代の女性までの10人が参加した。筆の持ち方からはじまり、姜先生の書かれた

콩(豆)、쌀(コメ)、오이(キュウリ)といったお手本の文字を練習し、それらの文字を自分で工夫して書いた「うちわ」に、姜先生が参加者のお名前を素敵にアレンジした書体で書き添え、お一人一人に差し上げた。

アンケートには、「先生のお人柄のすばらしさ」とともに「文字には伝える役目があることを実感した」といった感想が寄せられた。

日本と韓国は、ご飯を主食とするが、韓国では匙と箸、日本では箸と、その食べ方は違う。一方、両国は漢字文化圏にあるが、韓国はハングルを、日本はひらがな・カタカナを生み出してきた。「食」と「文字」の世界において、両国は同質性と異質性をあみもっている。こうして日韓の「似て非なる」文化をハングルカリグラフィーによって可視的に知ることによって、特別展における韓国の食文化とともに、ハングルにも興味をもってもらい両国の文化の理解と交流に寄与できたのではないかと考えている。



01 エントランスでのパフォーマンス風景 02 姜先生の指導のもと、自らの手で工夫して文字を描く

PROFILE

あさくらとしお
朝倉敏夫

1950年生まれ。専門は社会人類学、韓国社会論。明治大学大学院政治経済学研究所博士課程満期退学。現在、国立民族学博物館民族社会研究部教授。著書に『韓国食文化読本』（国立民族学博物館、2015年）などがある。



朴正熙をめぐる記憶実践

九州大学大学院
比較社会文化博士
大和裕美子

1. 訪韓フェローとして

私が日韓文化交流基金訪韓フェローとして、ソウル大学アジア研究所の東北アジアセンターで、鄭根植^{チョングンシク}先生の受け入れのもと、研究する機会をいただいたのは、2013年9月から2014年7月末のことになります。この度、日韓文化交流基金からのご支援を賜り、韓国に住みながら調査を実施できたことは、大変貴重な機会となりました。心から感謝申し上げます。

2. 研究を取り巻く現在の状況

テーマは、「韓国における朴正熙をめぐる記憶実践」です。フェロー申請時には、朴正熙と岸信介のイメージ形成との比較を試みることを考えていました。しかし実際に研究に着手してみると、韓国において、朴正熙をめぐる評価がいかに論争的かつ継続的に行われてきたかを実感し、現代韓国社会を読み解く一つの大きな切り口になり得ると考えました。そこで朴正熙に焦点を当て、分析することにしました。テーマの着想のきっかけは、2013年、「鬼胎」発言のニュースを目にしたことにあります。朴槿恵大統領に「朴大統領は日本の安倍晋三首相と同じく「鬼胎」である」と野党が発言し、これに対して与党側が「選挙で選ばれた大統領の正当性を否定する暴言である」と激しく反発するといった一連のやり取りに、政界だけではなく韓国社会全体で論争が巻き起こり、ニュース等で報じられました。「鬼胎」は「生まれてはいけない子供」を意味し、この言葉の発端は姜尚中、玄武岩著『大日本・満州帝国の遺産』（講談社、2010年）にあります。この著書の論旨は、安倍首相の祖父、岸信介と朴槿恵大統領の父、朴正熙はともに「満州人脈」という点で共通する「日本帝国主義の鬼胎」であったというものです。

「国を最もうまく率いた大統領」として圧倒的な支持を誇るのも朴正熙です。2015年8月7日に発表された最新の世論調査によれば、「国を最もうまく率いた大統領は」という質問に、朴正熙と答えた人は44パーセントで、2位の盧武鉉（24パーセント）、3位の金大中（14パーセント）を大きく引き離れた結果となりました（『朝日新聞』2015年8月11日）。

3. 朴正熙記念事業の推進

このように韓国社会において、朴正熙の評価をめぐる激しく議論が展開されています。朴正熙への評価が定まらない中、韓国では朴正熙の記念事業が盛んに行われており、2015年現在もなお進行中です。事業の一環として、「朴正熙大統領生家・民族中興館・銅像」（2013年1月完成）、「朴正熙大統領記念・図書館」（2013年11月完成）の2施設が完成しています。

これらの記念事業の動きは、2013年2月25日に大統領に就

任した朴槿恵の影響のみによるものではありません。朴正熙の記念事業は、1990年代後半に金大中大統領選挙の公約の実行として開始されました。当時も、朴正熙の記念に反対する人々も多く、論争が巻き起こることとなりました。2005年、資金収集の困難を理由に記念事業は中断されることとなりましたが、2009年には、裁判で中断を無効とする判決が下されました。2015年現在は、「朴正熙大統領記念・図書館」は記念館部分のみが完成したものの、図書館がまだ開館されていないことから、現在はそれを理由に論争が展開されています。

4. 記憶研究として

本研究では、朴正熙記念事業を「記憶実践」の一つに位置づけ、論を展開することにしました。朴正熙を扱った研究は数多いのですが、管見の限り、朴正熙に対する評価、あるいは記憶そのものが、研究の対象とされることは少ないのが現状です。その理由として、朴正熙をめぐる評価が、韓国において自明とされていることが挙げられます。従って、評価を前提にしたところから議論が開始され、ある評価への批判、あるいは肯定と否定の二分法から抜け出すことが説かれる傾向にあると言えます。これらの研究と



「朴正熙大統領記念・図書館」前にて



慶尚北道龜尾市の朴正熙生家に立つ銅像

は異なり、本研究では、まず朴正熙をめぐる展開される議論、とりわけその際に散見される言説——「経済発展」「反民主」「反民族」「親日」などに着目しながら、いまいちど検討し、その意味の読み解きを試みました。

従いまして本研究は、朴正熙をどのように評価あるいは記憶するのが望ましいかを主張することを主眼としたものではありません。そうではなく、韓国社会で朴正熙をめぐる評価が定まっておらず、激しい議論が展開されているという現象を、どのように理解し説明することができるかを考察するものです。

5. 朴正熙記念事業から垣間見えるもの

韓国滞在時には、朴正熙記念事業を中心に調査ならびに分析を行いました。主に用いた一次資料は、新聞ならびにインタビューです。以下では、紙幅の関係上、「朴正熙大統領記念・図書館」を中心に分析した結果について述べたいと思います。この施設の構想と建設、開館において散見された言説は、「経済発展」「反民主」「反民族」「親日」であり、朴正熙への評価は、肯定と否定に大きく二分され、否定はさらに二分されることが確認されました。すなわち、経済発展の功績を重視した相対的肯定、あるいは反民主的政権であったことを重視する相対的否定、あるいは経済発展の功績も認めない絶対的否定の三類型です。そして、記念館建設の中断と再開は、過去史清算事業——「親日」を「反民族」と位置づける盧武鉉政権との連関性から説明され得ることが分かりま

した。また高齢の世代が記念館を訪れる現象については、セマウル運動の体験や記憶と関連からの説明を試みました。

そして、朴正熙をめぐる記憶は、現代韓国社会をどのように捉えることができるか、という大きな問いの切り口になることが期待されるのではないかとこの仮説に対する確信を得ました。一見、紋切り型のように見えるこの肯定、相対的否定、絶対的否定という三類型も、その中に分け入れば、大統領直接選挙制の実現によって達成された「民主化」という認識枠組みの中で、「民主主義」なるものを模索する様相が窺えるものでした。朴正熙を否定し、運動する団体は、いずれも「理想の民主主義」を追求する運動の中で、朴正熙の記念事業への反対運動を展開しています。さらには、朴正熙のおかげで民主化された現在の韓国があるという興味深い語りも見られました。朴正熙をめぐる記憶実践は、韓国の人々が民主化以前の時代をどのように民主化以降の韓国社会の中に位置づけようとしているのか、その葛藤の様相を垣間見せてくれるものと思われます。

6. 訪韓フェローを終えて

韓国に滞在しながらの研究は、大変有意義なものでした。韓国社会を分析するにあたって、その社会に住むという経験はかけがえないものでした。最後になりましたが、ソウル大学アジア研究所の鄭根植先生をはじめとする皆様方に心よりお礼申し上げます。また同じくソウル大学を受入機関とされていた2014年度訪韓フェローの金誠先生にも、ソウル滞在中にはしばしばご助言を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。



「第54周年5.16記念行事」（2015.5.16）軍服姿の朴正熙の胸像が位置するソウル市永登浦区文来にて

PROFILE

やまと ゆみこ
大和裕美子

九州大学大学院比較社会文化学府博士課程修了、比較社会文化博士（2014年）。第5回平野健一郎賞受賞（2015年）。著書に「長生炭鉱水没事故をめぐる記憶実践——日韓市民の試みから」（花書院、2015年）がある。



日韓文化交流基金事業報告

本号では、2015年度第2四半期(2015年7月1日から9月30日まで)の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国青年 (大学生) (第1団)	李秉鎮(イ・ピョンジン) 世宗大学校国際学部日語日文学専攻 教授	35	14	21	7/14~ 7/23	早稲田大学、関西大学、 鹿児島県出水市
韓国青年 (大学生) (第2団)	朴淳希(パク・スンヒ) 釜慶大学文化融合研究所 先任研究員	35	11	24	7/14~ 7/23	帝塚山学院大学、鹿児島県出水市
韓国青年 (高校生) (第1団)	魯解斗(ノ・ヘドゥ) 光州文井女子高等学校 日本語教師	34	4	30	7/28~ 8/6	植草学園大学附属高等学校、 奈良県高市郡明日香村
韓国青年 (高校生) (第2団)	李東昌(イ・ドンチャン) 全北完州高等学校 日本語教師	35	13	22	7/28~ 8/6	千葉県立長生高等学校、 奈良県高市郡明日香村
韓国青年 (大学生) (第1団)	金直洙(キム・ジクス) 烏山大学校観光外国語系列 副教授	36	10	26	7/29~ 8/7	明治学院大学 沖縄県読谷村
韓国青年 (大学生) (第2団)	裴貞烈(ペ・ジョンヨル) 韓南大学校日語日文学科 文科大学長	36	8	28	7/29~ 8/7	青山学院大学 沖縄県読谷村
韓国青年 (大学生) (第3団)	李美淑(イ・ミスク) 明知大学校日語日文学科 教授	35	9	26	7/29~ 8/7	立教大学 沖縄県読谷村
韓国青年 (日韓交流おまつり in Tokyo)	金幼璃(キム・ユリ) 錦湖アジアナグループ	16	4	12	9/24~ 9/30	群馬県吾妻郡草津町



01 東日本大震災被災地訪問(韓国青年訪問団 大学生第2団) 02 ホームステイで養豚のお手伝い(韓国青年訪問団 大学生第2団) 03 浴衣着付け体験(韓国青年訪問団 高校生第1団) 04 千葉県立長生高等学校での生け花体験(韓国青年訪問団 高校生第2団)

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
福島県いわき市中学生	草野 仁 いわき市教育委員会 学校教育課長	50	25	25	9/6～ 9/12	鉢山中学校、亜洲大学校
日本大学生(外交部)	奥 奈津子 外務省アジア大洋州局 北東アジア課	30	6	24	9/15～ 9/24	韓国外交部、日韓交流おまつりin Seoulブース出展、韓国外国語大学校



01 沖縄県平和祈念公園(沖縄県糸満市) 韓国人慰霊塔にてボランティアガイドから沖縄の歴史を学ぶ 02 高麗神社訪問(韓国青年訪問団(日韓交流おまつり in Tokyo)) 03 鉢山中学校でサムルノリ体験(いわき市中学生訪問団) 04 城邑民俗村訪問(日本大学生訪問団)

2 「日韓交流おまつりin Tokyo」参加者からのお手紙紹介

私は理系の学生ですが、いま「日韓関係の改善」に関心を持っています。日韓関係の悪化は、多くの人びとに関連する問題で、多様な分野に従事している人びとの、多様な意見を集約して、解決策を用意する方向に行くべきだと思います。

現在の韓国と日本の関係は、近年急転直下の勢いで悪化しつつある状態です。さらに今年は、韓国と日本の国交が正常化されてから50周年となる記念の年にもかかわらず、両国間の関係はギクシャクしたままです。私はこのような状態が、民間にまで広がらないか心配です。そのため、今のようなこの時期だからこそ韓国と日本の間の民間の交流を継続し、拡大させ、お互いを理解して、配慮しあう社会の雰囲気がかたければ、政府間のギクシャクした関係も徐々に改善されると思います。

そこで、今後の未来を担う青少年の交流の拡充は、日韓関係の改善のための民間交流として必要だと思います。私は2008年の高校生の時、修学旅行で大阪、京都、奈良を訪れたことがありました。また、在大韓民国日本国大使館公報文化院の選抜、日韓文化交流基

金の主催による訪日プログラムに参加し、単に日本と日本語に関心を持つものにとどまらず、日本社会と韓日関係にまで関心が広がる重要な経験となりました。その後、大学内日本留学生アシスタントや諸行事の日本語通訳に従事したり、韓日国交正常化50周年記念サミット、韓日ジュニアフォーラム、その他セミナーなどに参加したり、日韓関係の改善に必要な知識を育むよう努力しています。一方、現在は在大韓民国日本国大使館公報文化院の運営する「日本文化院リポーター」の一員として、韓国における日本の魅力発信と日韓の相互理解を目的とした様々な活動を行っています。

小野理事長、そして日韓文化交流基金のすべての方、今回の日程のように、日本の様々な文化体験と韓日関係改善のための青少年交流を持続して下さって、ありがとうございます。これから韓国と日本の関係が肯定的な方向に進むことができるよう私も努力します。日本訪問期間中、本当にありがとうございました！

日本文化院リポーター ガン・テソクより

公募プログラム 助成のご案内

2016年度 人物交流助成

人物交流助成は日韓が共同で開催する草の根交流、シンポジウム・国際会議、芸術交流の各種事業を支援し、日韓の交流をより活性化・多様化させ、両国の友好・交流関係を深めることを目的としています。

草の根交流

一般市民による日韓相互理解のためのプログラム

シンポジウム・国際会議

日韓両国の文化や日韓関係など、両国に関わる人文社会科学分野のテーマを扱うシンポジウム・国際会議

芸術交流

専門家による公演・展示・共同制作など、芸術分野における本格的な交流を目的とする各種の文化事業

2016年度(2016年4月～2017年3月)実施事業に対する人物交流助成の申請を、2016年1月4日から1月22日まで受け付けます(募集は年1回です)。

故饗庭孝典評議員を偲んで

1985年4月より日韓文化交流基金の評議員を務めた饗庭孝典東アジア近代史学会副会長(元NHKソウル支局長)が、さる10月1日に永眠されました。故饗庭評議員は、1970年代後半に特派員としてソウルに駐在した経験を踏まえ、1999年の小淵総理・金大中大統領の首脳会談において設立が合意された「日韓文化交流会議」に日本側委員として参加(第1期、2期)。同会議が2002年に発表した「日韓文化交流に関する宣言(ソウル宣言)」の作成にも携わりました。ここに、故饗庭評議員が残された「日韓文化交流基金の目指すべき使命」に関する文章要旨をご紹介します。故人のご冥福をお祈り致します。

「自分が基金の評議員になったのは、初代須之部量三理事長と

の縁によるものであるが、須之部理事長は日韓関係について常々『なるようにしかならない。が、なるようになる。そうなるよう努力する』と述べていた。たとえ合意は得られなくても、主張をぶつけ合いながら、少なくとも相手の立場を理解しようとするのが大事、というのがその趣旨。今の日韓関係は『これまででない難しい状況』と言われるが、『何とかなる』『そうなるように努力する』という気持ちで、基金の仕事を進めていきたい。

(『日韓文化交流基金30年史』より)



表紙絵画紹介

『春を待つ(油彩100号)』(作者: 檜崎正博)

春に向けて枝から小枝が次々に出はじめて頃を画いた。新緑の下ごしらえが目立たないがたくましい。人々に困難があっても、努力するように励ましているように思った。

